

事例報告7：下町の緑

下町の緑の実態と効用～街と人とを緑がつなぐ

Praivate Green in "SHITAMACHI" District

真鍋千恵子 Chieko MANABE

はじめに～下町とその緑

空から見ると、下町と呼ばれる地域～荒川・墨田・台東といった区部東側低地の密集市街地への緑色は薄い。緑被率も、樹木被覆率も、緑のことで指標として上がってくる数字はたいてい低く、データの上では「緑貧乏」な地域といえる。

しかし、「路地の緑」礼賛の声もあるように、この地域の緑の面白さは、結構以前から耳目を集めていたようだ。私も目に入る緑の豊富さや、計画された緑にはない新鮮な魅力に感銘を受けた一人であるが、そこには情緒的側面を越えて、長い時間の生活文化で培われた、都市住宅と緑の一つのプロトタイプをみるよう思う。

下町の緑のあらましは、ごく個人的に育てられる住宅まわりの小さな緑が、外に向かって開かれることにより総体として街の緑となっているところにある。ここで「コミュニティ・ランドスケープと住まいの緑」というテーマで、下町の緑を取り上げる意義はどこにあるのだろうか。

一つは、空間的制約からの必然にしろ個人の緑が街に開かれることにより、「個人」・「緑」・「街、コミュニティ」

の3つの関わりが非常に強くなっていると感じることである。この関わり方の実際や効用を読みとることは、今後のコミュニティ・ランドスケープのあり方を考える意味で重要なと思う。

二つめに、自然発生的、住み手の自発的な意志による緑であることから、住宅地の緑として求められるあり方、ニーズを端的に表しているのではないか。

以下、特徴的な幾つかの実例を紹介しながら、下町の緑に学ぶことは何かを考えていきたい。

緑のある場所～住宅の廻り

下町地区には庭のある家は少数派で、狭い敷地いっぱいに建つ低層住宅が多い。多くの場合、建物と道路の僅かな隙間や建物の壁面、軒先等を工夫して緑が置かれている。囲障のない家の領域を示すものとして、また直に接する公空間との緩衝として、緑が実に有効に使われているのを見ることができる。¹⁾

はみ出し方のルール

5cm、10cmの攻防の末、個人の緑は敷地境界を越えて公の空間にはみ出していく。縁石-L字溝の蓋-歩道の線の範囲と程度は様々であるが、一つの路地のはみ出し具合は大抵揃っている。「通行の邪魔にならない」「隣近所の具合

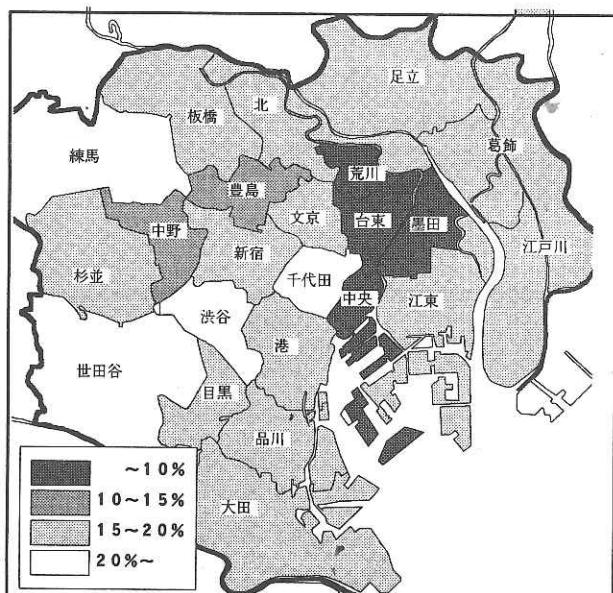


図-1 23区の緑被率（出典：足立区緑の実態調査・1995）



写真-1 玄関を除いて植木鉢が一杯、趣味の場だけでなく、公道に面する窓先のバッファーでもある。

*株ディーワーク

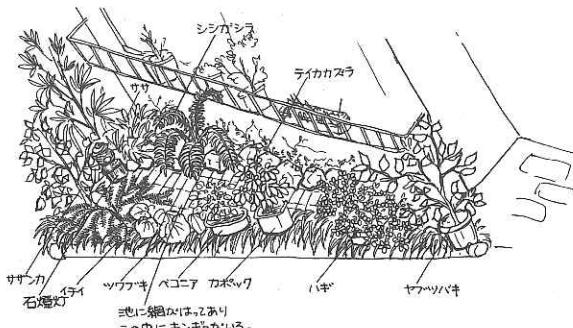


図-2 約 1 m²の中身の濃い極小庭園、金魚のいる池付き。通りがかる人が覗いていく「小さな名所」である。

を見ながら、突出しない」が基本であるようだ。

また、建物を新築した2項道路の後退部分では、かなり大胆な置き方も見られる。賛否両論だろうが限られた空間を暫定的に有効利用しているとの見方も出来るようだ。

道路を挟んだ地先利用²⁾

公道を挟み、自らの敷地を飛び越えた「地先」に、緑を置いたり洗濯物を干したりする場合がある。工場や学校の敷地まわりや歩道の植栽部分などによく見られる。

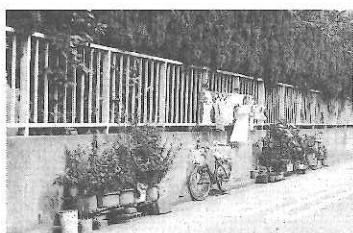


写真-2 学校敷地まわりの地先利用～道を隔てた2軒の家の利用。それぞれの敷地間口の範囲に収まっている。



写真-3 歩道植栽部鮮やかなタチアオイ。

写真4のような歩道植栽部の地先利用の例は、公共空間の占有であり、公的な植栽が私的植物に浸食されているよう見える。しかし、歩道植栽部への私的植物の表出を調査してみると、接する宅地側の空間的余裕と歩道植栽部への表出の相関関係は認められず、場所がなくて公の空間に溢れ出すのではないこと、利用に至ったきっかけを聞くと「人出入りで歩道の木が折れてみっともない」、「殺風景なので」「誰かが捨てていった物を世話している」というように、むしろ公の緑を補い、繕っている様子が伺われた。

表1は3本の通りで確認された出現率の高い植物である。通り毎に若干の偏りが見られることに注目したい。そのうち幾つかは、株分けなど近隣間でのやりとりによるものであることがヒアリングで確認できた。

表-1 私的植物の種類・通り別出現状況

A通り	ユニット数53	B通り	ユニット数36	C通り	ユニット数83
種類	出現率	種類	出現率	種類	出現率
1位 オモト	15%	1位 キク	25%	1位 アロエ	18%
2位 クチナシ	11%	2位 ミカン	22%	2位 オモト	12%
3位 ササ	9%	3位 ハラン	17%	3位 ナンテン	11%
4位 バラ	9%	4位 ピワ他2)	14%	4位 シソ他3)	8%
5位 ウメ他1)	8%				

- 1) アロエ・オシロイバナ・シソ・ヒメダイダイ・ヤツデ
- 2) アジサイ・ヤツデ
- 3) アジサイ・クチナシ・ヤツデ

一主体による区分毎に出現する樹種を調査し、全区分に対する出現率を算出した。例えば、A通りのオモトはその通りの区分15%に出現している

緑自体の特徴として

下町を彩る緑は季節の物が多い。多くが鉢物など可動の緑なこともあります。アサガオが終わったから今度はキクを玄関先に、というような季節ごとの入替えも頻繁にみられます。

また、「飾る」というより「増やす、育てる」のに主眼があるのか、時期が終わったら植え替える現代的園芸スタイルと全く異なった志向が伺われる家もある。(写真4)



写真-4 挿し木によって増やしたゼラニウムを壁面一杯に吊るした家

これらの植物により街の緑が楽しく華やかになっている側面もあるが、一方で雑然とする面も指摘される。実際、植えた人にしか価値の判らないものも数多い。

しかし、見た目や種類ということのみで、下町の緑を捉えるのは不適切であるようだ。図3は、歩道植栽部の地先利用の例であるが、一つ一つの植物に何らかの意味や思い入れがあり、育てる人個人の生活史や人生観を表現しているといつてよいだろう。

手入れの行き届かない緑は環境を向上させるとはいいがたい。しかししつこい位に緑を置いている実態、住まい手のニーズとして愛着のある植物を身近で育てたい欲求が確実にあることを、忘れてならないと思う。

街に人が出てくること～個の領域からまちへ

個の緑の集合が街の緑になるというだけでは、ランドスケープにコミュニティを冠する意味あいは薄い。もう少し個の緑と街・コミュニティの関係を考えてみたい。

公-私の接する空間の私的な緑が、街の緑となっている下町の緑の本質的メリットは、緑を足がかりにして自宅周

辺の環境へ関心が高まり、敷地境界を越えて場を維持管理する行為や責任感覚が、波及的に広がっていくところにあるように思う。緑によって領域意識が芽生え、自宅周辺をきれいにする行為が部屋の掃除のような自然な感覚で行われ、結果として街の環境を向上させている。

また、図3で明らかなように、人付き合いを介しての緑、又は緑のコミュニケーション誘発力は相当あるといつてよい。家の前を掃除して夏は打ち水をして～という、廃れたかのように思われるがちな伝統的都市の暮らし方が、緑の世話をしに街にでてくる人により連絡と続けられ、人づきあいのきっかけにもなる。下町という言葉から連想される地縁主体の旧来型コミュニティを礼賛するつもりはないが、顔を合わせて挨拶をし、共通の話題があったら会話をしても、というのはコミュニケーションのごく自然な形であり、別段身構えずともよいように思う。

下町の緑に学ぶヒント

下町の緑は計画的な意図が介在したものではなく、狭い空間故にうまれたものであるが、今後の住まいの緑づくりにおいて学ぶべき幾つかのヒントを考えてみる。

(1) スタートは自宅廻り

敷地を離れた地先利用でも、その範囲は敷地間口の幅に収まり隣近所での共有がないように、緑を育てることは個人の趣味、個人の行為としてスタートしている。共有の緑を共同で育てることが発展型としてあるにしても、まず最初の一歩は自宅廻りの個人的な、しかも公に開いた緑にあるのではないか。

(2) 「家の表の緑」が重要である

欧米のタウンハウスなどとも共通するのだろうが、下町の空間構成として特筆すべきなのは、家の表裏が比較的はっきりしており、家の表（玄関）の集合が通り空間をつくり、その公-私のインターフェイス空間に緑が存在する

ことだろう。アクセス方向に緑が置かれることで、その人自身とも、街や街の人とも関わりやすくなる。また、玄関先を飾る、整えることはごく一般的で、自然な行為であるよう思う。

(3) 「私的な緑を身近に置きたい」強い欲求を持つ人は、相当程度存在する

幅10cmでも、壁面だけでも、ごく狭い空間が緑化スペースとして有効にはたらいている。それだけ個人的な緑への欲求が強い。また空間的余裕に乏しくとも、緑豊かな街づくりが可能であるともいえる。

おわりに

私は下町に現在居住している訳でも、緑に関連した下町のまちづくりに積極的に携わっている訳でもなく、単なる野次馬的な観察者である。事例紹介としては多分に主観的であったようにも思う。

下町の緑を見続けて10数年になるが、最近はガーデニングブームの影響か、小綺麗なものが随分増えてきた実感がある。魚屋のトロ箱に植えられたオモト（卵のカラが伏せてある）の隣に、輸入物プランターに華やかなペチュニアなどが植えられているのを見ると、いろいろな人が住んでいる都市の活力を感じる。今後の課題の一つに、「街の共有の財産としての私的な緑の質」をいかに向上させるかがあげられるだろう。しかし多少雑然としていても「そもそも住む人の個性」と許容できるようなまちの度量も、また求められているように思う。

補注・参考文献：

- 1) 荒川すまいづくりセンター自主研究 (1990) : 荒川緑図鑑
- 2) 真鍋千恵子 (1989) : 歩道植栽部における地先利用の実態と特質について : 千葉大学卒業論文

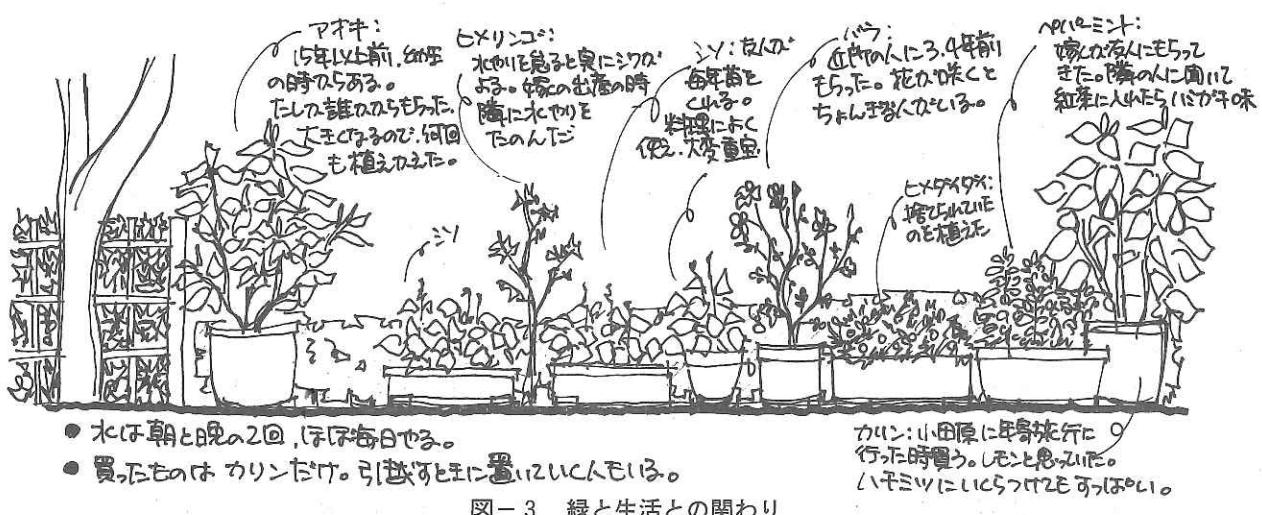


図-3 緑と生活との関わり